

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 永田 雄一

論 文 題 目

Fully endoscopic combined transsphenoidal and supraorbital
keyhole approach for parasellar lesions

(傍鞍部病変に対する完全内視鏡下経蝶形骨法眼窩上鍵穴法同時手術)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

亀井 讓



名古屋大学教授

委員

曾根 三千彦



名古屋大学教授

委員

有馬 寛



名古屋大学教授

指導教授

若林 俊彦



論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

通常、経鼻経蝶形骨手術での治療が困難な傍鞍部病変に対しては、従来から経鼻開頭同時手術の有用性が報告されてきた。しかしながら従来の顕微鏡を用いた経鼻開頭同時手術には、患者への高侵襲性、互いの術野への干渉など、大きな欠点も存在した。今回我々は、新規の経鼻開頭同時手術である完全内視鏡下経蝶形骨法眼窩上鍵穴法同時手術 (combined eTSA-eSKA) を考案し、その有用性、安全性について確かめた。検討の結果、combined eTSA-eSKA は従来の経鼻開頭同時手術の欠点を克服し得る手術法であると考えられた。またその手術成績に関しても、従来の経鼻開頭同時手術のそれと比較し同等の成績であった。この結果、combined eTSA-eSKA は治療困難な傍鞍部病変に対する安全かつ有効な手術法の 1 つになり得ることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 眼窩上鍵穴法の皮膚切開は眉毛上縁に沿って行った。他の方法としては hairline 内側に弧状皮膚切開を置く方法もあり、整容の観点からは望ましいとされている。しかしながら hairline 内側の弧状切開では、下方に翻転させた皮弁が経蝶形骨法の手術操作の妨げとなり得るといふ欠点も存在する。個々の症例に応じて、適切な皮膚切開デザインを考慮することが重要になると考えられる。

2. 悪性腫瘍は良性腫瘍と比較して、周囲の正常組織を浸潤性に破壊しながら発育する傾向が強いため、手術により周囲の正常組織を損傷する可能性が高い。また腫瘍摘出率が高い方が、生命予後を改善するという報告も存在する。Combined eTSA-eSKA では 2 方向から腫瘍摘出を行うことで解剖学的に到達可能な範囲を拡大し腫瘍摘出率向上に寄与すると同時に、2 方向から協力した腫瘍摘出操作を行うことによって周囲の正常組織の温存に努めたより安全な腫瘍摘出を行うことが可能となる。このため本手術法は良性腫瘍のみならず悪性腫瘍に対する適応も十分に有すると考えられる。

3. combined eTSA-eSKA では 2 方向から腫瘍にアプローチすることで術野の死角を減少すると同時に、2 方向から協力した腫瘍摘出操作を行うことで周囲の正常組織の温存に努めたより安全な腫瘍摘出を行うことが可能となる。症例数が少ないこと、含まれる症例の不均一性などの理由により、従来の経鼻開頭同時手術との統計学的な比較は困難であるが、視床下部機能を含めた正常機能温存に対するメリットも有する可能性があると考えられる。

本研究は治療困難な傍鞍部病変に対する安全な治療を確立する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	永田雄一
試験担当者	主査 亀井讓  曾根三千彦  有馬寛  指導教授 若林俊彦 			

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 眼窩上鍵穴法の皮膚切開デザインについて
2. 悪性腫瘍に対する適応について
3. 視床下部機能など正常機能温存に対するメリットについて

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、脳神経外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。